Sample

詩篇

考える葦　久間木志瀬　4
標本箱　戸嶋歩　10
鈍色のきおく　河津ゆき　18
夏の残像　ねはかえで　24
ここをゼロ番地といたしましょう　栞撫　30
anonymous26　穂高遊　40
無事　志邑左記　52
交尾録（序）　二三川練　62

企画

熱海合宿　合宿レポート／吟行詩　72
〇〇の12番目　98
著者紹介　110

Sample

ホンモノ

久間木 志瀬

大人になったわたしたちは
月額課金制の檻をかんたんに開けて
手のなかに残った時間を閉じ込める
終わることのない横断歩道で
みずからの心を売り捌くことに失敗した人々は
しらしらとあかるく開けた路傍へと散っていく
あとに残るのは　ただ家路を辿る人々
『続きを読む』ボタンの先を見て
ガラスの上に残した指紋をもてあそぶように
触れた指を横にずらし
言葉を超えた否定を表現する
退会はこちらから

朝焼けの下
まだほそい脚をした仔馬が
頭を撫でてもらいたくて寄ってくる
和毛（にこげ）のうえに伸ばした手を
油彩のように重たい太陽が照らし
また一つ
扉の開いた音を聞く

また一つ
夜を抜けてきた体の奥に
たった一つだけのナニカを守っている

Sample

娘の夢

戸嶋 歩

誰にもみせない一番おきにいりの服をきて
誰にもみせないまじないをして
誰にもみせないピアスにふれて
息を吐いてから横になる
平熱35・6度の娘
（娘の髪がいつもうつくしいのは、夜に Periplaneta fuliginosa が油を足しながら梳かしているからだ）
その寝息を吸いつづけた天蓋付きベッドのレースは
いまではすっかり香木の複雑さをまとい
あたりいちめんにかおっている
娘は
この完熟のレースを
ハキリアリが切り取っていき
湿った巣のなかで
ミルク色の菌糸で染めなおす夢をときどきみる
雌蟻たちのこまやかな破壊と
かがやく肢体を見つめているうちに
彼女たちがふいに娘に触れる
かたくかるい心地に
娘はちいさな笑い声をあげる

Sample

緑道

河津 ゆき

舗装されている道を歩く
降り続いている雨が歩道をぬらして
はなし続けている
わたしとあなた
合わない歩幅
目線
話の内容
呼吸だけはたしかに聴こえて
焦点が会わないまま
前を見て歩く

うす曇りの緑が
あなたの涼しい目元に反射する
歩き続ける
互いに前を見ながら
はなし続ける
もう少しで
緑道がおわる

Sample

六月二十三日

ねは かえで

燃えている
火
じりじりと
目をそらしても
つむっても
じりじりと
あつい

睫毛で堰きとめられなかった
汗が目をとおって
しみて痛い
いたい
瞼のうらがわに焼きついている
火が
また見える
轟音が
また聞こえる

汗が落ちる
皮膚がゆっくり
灼けていくのを感じる
じりじりと

Sample

お向かいの記憶

栞撫

おうちが一軒たちました
かつて　誰かが住んでいた
雑草　生えてた
その土地に

あっという間のことでした
主のいない　窓辺から
縦に積まれた本たちが
ぢっと　こちらをみてたのは
去年　桜が散ったころ
解体屋さんが　やってきて
銀のフェンスで囲まれて
黒い土
だけになったのは
今年　桜が咲いたころ

きいろいロープは頼りなく、
ブルーシートははためいて、
うちの犬は吠え続け、
大粒の汗　はじめて　背中を伝ったら
外国の鼻歌　聞こえてきた

きっと　家族が住むでしょう
きっと　朝が早いでしょう
きっと　夜には玄関の　ポーチの明りがつくでしょう

誰か
知らない人たちの
おうちが一軒たちました。

Sample

さるすべり

穂高 遊

しろい百日紅が
もこもこと膨らんで
入道雲になって
空に浮かび
そよいだり
ひかったりしている

手をのばして
ふれて
引きよせて
その香りを
たしかめることもできるけど

じぶんがされて嫌なことは
したくないからね

Sample

凶器

志邑 左記

あなたのその心の黒いところに
指をズッと押し込んでみる
腐っているのか
それとも甘く熟れているのか
とても柔らかく私の指を包む

カウンターには専用のスタンドに吊るされた実芭蕉（バナナ）
まだ青さの残って食べごろではない
これを凍らせて
釘が打てるほどになったら
あなたの頭だって
割れる

麦酒（ビール）を呑んでまぬけに寝ている
あなたの吐息からも実芭蕉の薫り
あなたとわたしは何度もぶつかって
至るところ
黒く傷んでいる
かじっては吐き棄て
かじっては吐き棄て
もう食べられるところはなさそう

Sample

交尾録（序）

二三川 練

序

1

物心ついたときには、ぼくはとっくに二つ足のけだものでした。
都会でもなければ田舎でもない、下町と呼ばれるでもない足立区栗原の住宅地は、毛むくじゃらの子どもが育つのに大変ふさわしい。ぼくはまっくろな体毛に絡めとられた皮膚の奴隷でした。糸人形の哲学を牛乳とともに飲みこんで、すっくすっくと育ちました。

初め、ぼくは火に憧れました。五歳の誕生日をむかえると白いケーキにろうそくの火がゆらめきます。触れてはいけないその光を、ぼくは黒目が焼けるほど近づいて見つめました。すると母親が「あぶない！」と叫んであっというまに火を吹きけしたのです。まっくらな部屋に明かりがついて、白い煙のむこうに母親の顔が幽霊のようにぼおっと浮かんでおりました。七時をむかえて鳩時計が、バースデーソングを歌います。

かわきたる　次男のまなこ　家系図の　根を噛みながら　少年兵亡し

あゝ　金魚鉢におのれを迷子と信じてやまぬ金魚一匹
右に左に尾をゆらめかし
神さまのつめたき手こそ
おのれの墓になるらんと
信じてやまぬ
金魚一匹

ジュースの瓶があいたころ、兄は太鼓をたたきました。父母がそれにあわせて手拍子します。びりりびりりと鳴る音に、毛むくじゃらの皮膚がふるえました。泣きながら叫ぶと父も母も兄もにこにこと笑います。
「かわいいねえ」
「死ぬのがこわいんだねえ」
「お前は母親の常夜から生まれたのだからねえ」
ぼくは一晩中泣きました。からからの喉は砂のよう。まっくらやみに目をあければ、窓から、天井から、掛け布団のなかから、蝶の翅から、ぼくの睾丸の内側から、死の舌先がせまります。たまらずぼくは、バースデープレゼントをねだりました。

Sample

おかあさん、ぼくを不老不死にしてください！

その日からぼくは、ぼくのことを「おれ」と呼ぶようになったのです。

Sample

企画

熱海合宿

詩会クレプスカでは、毎年九月に合宿を行なっています。
今年の合宿先は熱海。連休に誘われてやってきたのは、
私たちだけではなく台風もでした。
そんな二泊三日の出来事をまとめた「合宿レポート」と、
旅先での経験をテーマに詩を書く「合宿吟行」を掲載し
ます。



目次

★紀行文
熱海合宿レポート　74

★吟行詩
音のない音楽　久間木 志瀬　80
旅先　戸嶋 歩　82
サンビーチ　河津 ゆき　84
静謐　ねはかえで　86
一夜干し　栞撫　88
酔狂　穂高 遊　90
帆船　志邑 左記　94

Sample

企画

○○の12番目

今回でクレプスカの機関誌は十二号目となります。干支でいうなら一周。卵のゆで時間でいうなら固ゆで。

号数にちなんで、十二個以上あるものの十二番目のもので詩を書いてみることにしました。

会員たちがどんなものをテーマにしたのかにもぜひ注目してみてください。

もくじ

一日の終わりに 〔創世記〕 久間木 志瀬 100

水中 〔二十四節気〕 戸嶋 歩 102

にがり 〔元素〕 河津 ゆき 104

The Hanged Man 〔タロットカード〕 穂高 遊 106

花道 〔百人一首〕 志邑 左記 108

〔 〕内はテーマ

編集後記

クレプスカ12号をお手に取っていただきありがとうございます！

毎号11月の文学フリマ東京に合わせてクレプスカを作っているのですが、今年は例年より早めの開催のためあらかじめ原稿のスケジュールを調整して臨みました。ちょっとバタバタしましたが、なんとか……なんとか発刊できて良かったです。来年こそはもっと余裕を持ちたい（毎年言っている）

ところで、今年の夏にクレプスカのホームページをリニューアルしました。今までもそうでしたが、要件定義から設計、デザイン、実装まですべて会員だけで作っています。まだ準備中ですが、これまでのクレプスカの試し読みもできるようにしていきたいと思っておりますので、ぜひアクセスしてみてください！

（ねは）

クレプスカ　第12号

2026年11月8日　発行

発行	詩会クレプスカ
編集	ねは かえで
本文デザイン	ねは かえで
表紙イラスト	穂高 遊
表紙デザイン	戸嶋 歩
印刷・製本	ちょ古っ都製本工房
E-mail	krepuska001@gmail.com

Website　https://krepuska001.stars.ne.jp/

Twitter（X）　krepuska001

Instagram　krepuska001

ご感想は【#クレプスカ】で
つぶやいていただけると嬉しいです！

通販はこちらから
https://krepuska.booth.pm/